

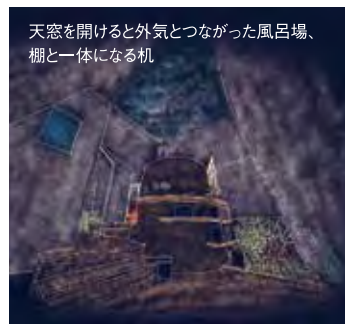
## 石 珂鳴

京都工芸繊維大学

【作品名】土柱の家 -自然を介して心繋ぐ-



開いたスレート屋根、  
道につながる庭、ペラダ



天窓を開けると外気とつながった風呂場、  
棚と一体になる机



廊下の読書スペース、  
窓沿いの休憩スペース、庭

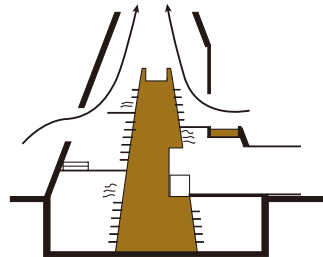


暖炉を囲むリビング、吹抜、小庭

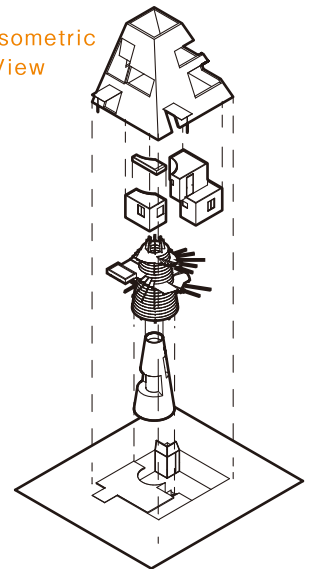


### 土柱の保温効果、通風

土は通気・調湿・調温の性質を持つ素材である。土に無数の気泡が入っており、外の空気と中の空気を自然に入れ替え、空気を循環させる換気効果を持つ。蒸し暑さやじめじめした空気を緩和し、夏は涼しく冬は暖かい快適な室内空間が期待できる。屋根の形とところどころの開口部、吹抜によって下から上へ風の通路ができて換気効果がある。



### Isometric View



### 設計コンセプト

コロナウイルスが蔓延しつつある今、ディスプレイ越しの/フェイスシールド越しの/マスク越しのそんな対面が続く毎日、私達の五感を開放できる場所は家しかないのではないかと感じた。もう一回振り返って日本の堅穴住居を見ると、現代の生活と遠くなりつつある土の存在に気づく。土のザラザラとした質感、心が安らぐ匂いとぬくもりはなぜか子どもの頃の記憶を呼び起こしてくれた。そこで土を用いて家族みんなをつなげる家を設計したいと思い、津島遺跡が発見された岡山運動公園近くの住宅街に敷地を選んだ。敷地内の土を一階分掘って土の柱を作る。木のフレームを土の柱に挿入することによって構造を補強

しながら、机や本棚ができて、家族それぞれの趣味のものの展示スペースにもなる。土柱と外壁の間に高さが違う寝室を配置する。幅広い階段で上下をつなぎ、生活空間を部屋の外へ拡張する。また土の内部を削り、薪風呂や暖炉、キッチンなどの機能を備え、土柱は家族が集まる媒体的な存在になっている。土のぬくもりと風とともに家族がお風呂や暖炉を囲んで楽しい時間を過ごし、お互いの心を支え合いながら、このコロナ禍の時代を過ごす。

### 審査委員講評

この作品を見たとき真っ先に思い浮かんだのが、アフリカ西部の国・マリの世界遺産ジェネの旧市街、泥で作られた巨大建築群でした。しかし、独特の世界観で描かれた間取り図、立面図のイラストを眺めていると、小さい床面積ながら縦方向に広がる見事なスキップフロア空間が見て取れました。暖炉で暖められた空気が家全体をめぐる、心安らぎます。